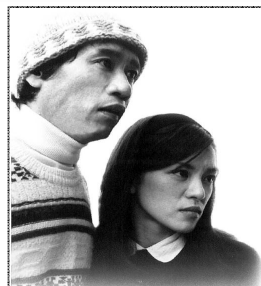


一般財団法人 全日本ろうあ連盟 創立60周年記念映画

ゆずり葉 上映会

あの感動をもう一度！



ゆずり葉

日本語字幕スーパー付

ろう者への差別をなくす運動の記録映画の制作を再開し、俳優を目指している吾朗と出会う…

30年の時を経て人間と家族の愛がよみがえる

主演 庄崎隆志

脚本・監督 早瀬憲太郎

日 時：2019年3月31日（日）

昼の部：14時～16時（受付13時～）

夜の部：18時半～20時半（受付17時半～）

会 場：大阪府谷町福祉センター2階

鑑賞料：500円（1回）

～「ゆずり葉」はすてきな映画です～

- ・感動的で、泣いてしまった。
- ・ろう者と健聴者が一緒に映画を楽しめて良かった。
- ・ゆずり葉のタイトルの意味の深さに感動しました。
- ・救急車を呼べない冒頭のシーンからずっと考えさせられました。
- ・最後まで観客が立ち上がらなかったのはすごい、とホールの職員から賞賛の声があがったほどでした。
- ・1回だけでなく、2回、3回と見ていくと、素晴らしさが深まっていくような感じがする。また機会があれば、もっと見たい。
- ・私はもう年だが、昔は映画にあったように、まさに手話のない世界に生きてきた。今や手話が「ことば」だと言われ、コミュニケーションが豊かになってきている。しかし、目に見えない壁という現実があり、この映画を土台に差別のない社会へつなぐアピールが出来ればうれしく思う。こんな素晴らしい映画は初めて見た」（71歳ろう高齢者）

（2009年 大阪府内上映会27会場からの声）

お問い合わせ先：公益社団法人大阪聴力障害者協会 事務局

（担当：長宗・中野）

〒540-0012 大阪市中央区谷町5-4-13

大阪府谷町福祉センター3F 大阪ろうあ会館内

TEL：06-6761-1394 FAX：06-6768-3833

全日本ろうあ連盟創立60周年記念映画「ゆずり葉」は、2009年に全国各地で上映運動が行われました。

当時、全国で14万人、大阪は8596人に鑑賞いただきました。あれから10年。段また段を成して「などを見て、ゆずり葉」も見てみたい！という要望にお応えして、上映会を企画します。

全日本ろうあ連盟は、2020年に「ゆずり葉2」を公開予定です。むかしご覧になった方も、もう一度、気持ちも新たに「ゆずり葉」を見てみませんか。

2009.7.7

発信箱



吾朗は将来のスターを夢見る若者。聴覚の障害を隠しオーディションを何度も受けるが、不合格が続く。

敬一は63歳。腕のいい大工。かつて、自らもそうであるろうあ者への差別法令改正運動の記録映画作りに打ち込むうち、身重の恋人を体調の急変で失い、自分を責めて心を閉ざす。恋人は健聴者。両親に結婚を反対されたが振り切り、敬一と下町の小さなアパートで暮らしていた……。今夏公開され全国巡回中の

玉木 研二 (論説室)

ゆずり葉

映画「ゆずり葉」(早瀬憲太郎脚本・監督)は、この2人の男の偶然の出会いとぎすぎすな軸に展開する。それぞれの恋、幸福の追求と挫折、疎外、愛憎と対立、和解が縦横に織り込まれ、終幕で意表をつく脚本、演出は見事だ。

早瀬監督をはじめ、キャストの多くも耳が聞こえない。映画は全日本ろうあ連盟が創立60年の記念に製作した。という、啓発的なタッチの作品と思われるかもしれないが、そうではない。脚本や演技の細部に宿るリアリティーの重さ。中でも荒い息づかいで応酬する手話の言い争いの場面は、字幕につ

いていけないほどのスピードと気迫で見る者を圧する。この発信力は私が初めて知るものだった。激しい手や表情の動きは決して声の「代役」ではなく、それ自体が豊かな表現世界なのである。そう気づかせるところにこの作品の力と普遍性がある。

映画館を出た時、世の中が入館前より少し異なっているというのが名作の条件なら、これもそうに違いない。少し考え、書店でNHKの手話のテキストを買った。まず目に入り覚えたいのは、のどから親指と人さし指を合わせながら下ろす表現。何? <好き>という意味だ。

世の中ナビゲーター NEWS NAVIGATOR

2009年7月7日(火曜日)

毎日新聞 「発信箱」

2009年4月8日(水曜日) 朝日新聞 「天声人語」

天声人語

ユズリハという木を保存したろうか。若葉が出そろったのを見届けて古い葉が落ちることから、この名がついた。生命力を護る、勢いを絶やさない縁起物として、祝い飾りにも使われる

▼全日本ろうあ連盟が、創立60周年の記念映画「ゆずり葉」を作った。世代を超えて引き継がれる、ろう者差別との闘いを、切ない恋や親子の愛を通して描いている。6月から各地で上映会がある▼主演の庄崎隆志さんらろう者も、今井絵理子さんら健聴者の役者が、手話のセリフを使って演じた。聞こえず、話せない世界がどんなものか、健聴者の一見をお勧めしたい。早瀬憲太郎監督は「聞こえても聞こえずなくとも楽しめる、新しい映像文化の可能性を探った」という。自身もろう者だ▼海外のテレビで「刑事コロンボ」を見た人が、言葉が解せぬもどかしさをぼやいていた。「犯人は分かるのに動機がちゃんぶんかんぶんだ」と。字幕のない日本映画やテレビ番組も、ろう者には味気ないものだろう▼外見で分かりにくい聴覚障害は、不便も実感しづらい。救急車を呼ぶのもメールがファクス、それも知人を介してと聞き、ようやく深刻のほどに思いが至る。ろう者の権利や福祉を広げる運動は、文字通り命がけだった▼今では、聞こえなくても車を運転でき、資格の壁も崩れてきた。薬剤師の先駆けとなったのは早瀬監督の妻久美さんだ。聴覚に限らず、ハンディを負う人が生きやすい社会は高齢者にも優しい。日本語の字幕を追いつながら、ユズリハの営みを一人でも多くに伝えたいと思った。